

クザーヌスによれば、神はその一性において万物を包含する一方で、その神の一性は事物の多性において展開する。つまりクザーヌスは、万物の包含としての神を「固有で語り得ない名称」とする一方で、さまざまにあり得る肯定的名称を、その固有の名称によって包含されているものの展開として捉えている。このように、包含と展開の理論は、クザーヌスの神名論の形而上学的基盤をなすものとして見ることができる。

クザーヌスにおける神の名の議論が包含と展開の理論をその基盤として持つということは、その枠組みが彼の肯定／否定神学を理解と密接に関連していることを意味する。実際に彼は、「肯定神学」は必然的に「否定神学」によって補われる必要があるとしているが、その理由を、包含と展開の理論から与えている。つまり、一方では、いかなる宗教においてもその礼拝は必然的に神についての積極的な肯定によって基礎づけられねばならないが、他方では、似像そのものが真理と取り違えられる「偶像崇拜」(idolatry)を避けるためにも否定神学は不可欠とされる。こうした見解は、基本的にはディオニシオスの枠組みをほぼ忠実に踏襲するものだが、ディオニシオスが神名の議論においてその形而上学的前提とした階梯論的枠組みと、クザーヌスの神の名の論点には、明確な違いが認められる。

クザーヌスには、包含と展開の理論を補足するものとして「縮限」(contractio)の理論があり、そのプロセスは確かに「自然の秩序」(ordo naturae)を背景とした段階的なものとして描かれている。だがそれは、神名の位階としての意味を持つものではない。むしろそれは、神と宇宙、さらには個々の被

造物の形而上学的連関を説明する理論的枠組みとしての意味を持つものである。

クザーヌスにおいてそうした視点が可能となるのは、彼が神を、自然の秩序の頂点に位置するような存在として捉えてはいないためである。彼にとって神とは、空間的な比喻において、宇宙の縮限の諸段階の上に、それらを超越してあるような存在ではない。むしろ「神は、宇宙と個々のものの始めであり中央であり終わりであるので、万物は、上昇しようと、下降しようと、中央に向かおうと、いずれにせよ、神に向かつていく」のである。こうした神の觀念に立てば、神名の階梯であれ自然の秩序であれ、神を指して登り詰めるべきものとしての梯子、あるいは階梯はその必要性を失うことになる。神との類似に従って階梯を段階的に登りつめるといふディオニシオスの神名論の、またその流出論的な肯定／否定神学の性格そのものが、クザーヌスにおいては変容を余儀なくされるのである。

永遠についての瞑想

——時間と永遠をめぐる神学的哲学的考察——

福 嶋 揚

過去と現在と未来から成り立つ時間は、人間の実存形式であるが、同時にその実存の統一性と同一性を脅かすような、いわば非形式でもある。時間は死と同様に、人間の生命の不可欠の

第5部会

構成要素、本性でありつつ、同時に解体の危機、非本性でもある。西洋の哲学や神学においては、このような人間存在の時間性を否定し排斥するものとして、神的な永遠を求める傾向が強い。

しかし永遠を単なる無時間性としてではなく、流動し変化するものを含みつつ、なおかつ持続性を持ち不変であるようなものとして表象することによって、時間を通路として永遠を想定する可能性が開かれる。カール・バルトは、ギリシャ・ヘレニズム的「永遠」概念とは異質な、ユダヤ・キリスト教における「永遠」概念の特徴として、永遠と時間の密接な相互関係に注目する。バルトはまた、永遠と時間を相互排他的に捉える傾向を脱した先駆者として、ボエティウスに着目する。ボエティウスは永遠を「無限の生命の全体的でなおかつ完全な所有」と定義する。このような永遠においては、過去と現在と未来、起源と運動と目標、可能態と現実態が全て同時にあり、純粋な持続が実現している。

バルトの永遠理解のさらに際立った特徴は、永遠を三位一体論を用いて表象し、それによってキリスト教的永遠概念の固有性を明確化した点である。父、子、聖霊は、本質において一つであり、三位格として区別されつつ、分離されることがない。父は由来、子は現在、聖霊は未来とも捉え得る。さらに父、子、聖霊はいずれも、自らの中に由来と現在と未来いう三要素を内包する。このような三位格、さらに各位格に内在する時間の三様相は、互いに区別されつつ相互浸透する。バルトはこのような三様相を人間の経験する過去、現在、未来から区別する

ため、「前時間性」、「超時間性」、「後時間性」と呼ぶ。ボエティウスの永遠においては、三様相の同時的現在に力点が置かれる。しかし三位一体論的な永遠は未来への不可逆的な方向性を持ち、その意味で到来し実現しつつあるものである。

永遠とは、人間存在の根本構造である空間性と時間性に対して、不可分、不可同、そして不可逆の関係にありつつ、それを根底において成立せしめる先験的なものである。永遠は時間を排斥する神の特権領域ではなく、自らを超え出でて関係を創造する、脱自的運動性を持つ。永遠は、前時間性としては万物に先立って在り、超時間性としては万物と共に在り、後時間性としては万物の終極において在り、その全体において万物のために自らを捧げる存在である。

人間が永遠へと向かう態度をカルヴィンやバルトは「未来の生命への瞑想」と呼ぶ。瞑想は不変で持続するものへの希求であるが、単なる観照的態度ではなく、また対象との無媒介的な融合を試みる神秘主義的態度でもない。瞑想とは、永遠と時間の不可同性の自覚であると同時に、理論理性による証明が不可能な対象への、ある独特な信頼の姿勢である。

永遠が時間の原像であり、時間が永遠の似姿であるとするならば、時間とは本来、永遠において実現されている関係性の充溢を反映し実現する場であるといえる。永遠への瞑想によって、時間は他者との関係の創造実現の場として常に新たに捉え直され、変革へと呼び覚まされる。永遠とは、有限の時空に生きる人間を関係の創造へと招き続ける地平である。関係の実現は命であり、忘却や無関心や関係喪失は死へと通ずる。キリス

ト教という歴史的一宗教は、ナザレのイエスという一人物の献身的実存を手掛りとして、永遠について瞑想する。永遠への瞑想とは、永遠の時間への献身に対して、人間が有限の時空の中でその都度新たに応答して生きる態度であるということができ

「アーリア人イエス」の宗教史

久保田 浩

本発表は、ヴァイマル期・ナチズム期ドイツにおける「アーリア人イエス」という表象を、宗教(思想)史的文脈に位置付けつつ、同時代の宗教的所与に対する宗教実践的行為として分析するものである。

ユダヤ教的伝統に依拠して形成された「キリスト・イエス」という、イエス像形成の教義的参照枠を前提としないイエス像が現れてきた啓蒙期以降、特に一九世紀において、文献学的・歴史学的分析に基づく多様なイエス像(合理主義的、自由主義的、宗教史的、終末論的解釈)が提出されてきた。同時に、イエス像構築の為の史資料の検討が進捗した。しかしその結果、こうして提出されてきたイエス像の虚構性(イエス伝著者の倫理的理念の投影)、並びに、史資料の不在(マルコ福音書、Q資料の信仰告白的性格)というアポリアが現れてきた。これがヴァイマル期以降のイエス伝・イエス像構築の前提であっ

た。

まず、ヴァイマル期・ナチズム期のイエス伝・イエス像の二つの事例を紹介する。プロテスタントの牧師フリードリヒ・アンダーセンは、当時の通俗的人種理論に依拠して、イエスを「ガリラヤ人」(「アーリア人」と同定し、イエスは当時ユダヤ人支配に苦しんでいたガリラヤ人に対し、妬みの神でも復讐の神でもない、父なる神の愛と、隣人愛を紐帯とする「神の国」の教えを説いたと述べる。イエスは、ユダヤ人であったユダの裏切りによって処刑されることになるが、ユダの裏切りと自らの死を予期しつつも、最期の時に至るまで、愛の神に対して忠実であり、誠実かつ勇敢な態度を示し、英雄的な(「アーリア的な」)自己犠牲の精神を貫き通したとされる。他方、民族主義的キリスト教の著作家アルトゥーア・ディンターは、心霊として創造されつつも罪に陥った(物質性を帯びた)人間の為に、救い主イエスは、悪しき物質的存在の中でも最も霊的存在に近いアーリア人種として受肉し、アーリア人に物質的世界(ユダヤ性)からの解放の教えを説き、その道徳的实践を人間に模範として示したと主張している。

アンダーセンのイエス伝の根幹には、断片的な福音書記事から、イエスの生涯の言行に一貫する連関を見出そうとする意図(それを彼は「非ユダヤ人イエス」像に見出している)と、その連関に基づく文学的創作としてイエス伝を描き出そうとする意図が見られる。こうしたイエス伝創作の雛形と看做されるのは、一八世紀の啓蒙主義者カール・フリードリヒ・バールトのイエス伝(秘密結社エッセネ派教団のメンバーであるイエス